

組織コミットメントの観点によるクラスコミットメント尺度の開発 (中学生用)

大澤靖彦・岡本 香

東京福祉大学 心理学部 (伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 伊勢崎市山王町2020-1

(2017年11月9日受付、2017年12月14日受理)

抄録: 本研究は、中学生を対象としたクラスコミットメント尺度の作成を目的とした。公立中学生517名を対象に、質問紙調査を実施した。因子分析の結果、14項目、3因子が抽出され、(1)「情緒的愛着」、(2)「集団同一視」、(3)「規範意識」と命名した。3つの因子について、学級満足感尺度を用いて尺度の妥当性を検討した結果、相関関係が認められた。この結果は、クラスコミットメント尺度が十分な信頼性と妥当性を持っていることを示唆した。

(別刷請求先: 大澤靖彦)

キーワード: コミットメント、情緒的愛着、集団同一視、規範意識、中学生

緒言

組織コミットメントは、成員と組織の心理的な距離を測る概念であり、成員が組織をどのようにとらえるのかを知る手掛かりとなる。組織活動においてコミットメントは重要な要因であるとされ、組織コミットメントに関する研究は、「組織コミットメントの高い者は、パフォーマンスをあげ、欠勤、遅刻、離職などの逃避的行動が少ない」という仮定の下に研究が進められてきた。例えば、組織コミットメントの低下が離職につながること (Porter et al., 1974)、組織の中で与えられた役割以外の他者への援助との関連 (O'Rleilly and Chatman, 1986)、組織コミットメントと仕事に対する満足度との関連 (Reichers, 1986; Cohen, 1993) などが示されている。さらに、Mowday et al. (1982) は、組織コミットメントが個人に安心感や所属感を与え、安定した精神状態がストレスの悪化を防ぐとしている。その逆に、低いコミットメントは、人生における目的やゴール、所属感、安全感、効力感を貧困にし、ネガティブな自己イメージにつながるとしている。

このように成人の組織コミットメントについては数多く研究されてきたが、これまで児童生徒の組織といえる学級におけるコミットメントについては研究がされてこなかった。これは、組織コミットメントは企業の組織活動にかかわるものであり、労働力と賃金 (生活の保障) との交換という意味での功利的要因が、学校という組織にはそぐわないと考えられてきたためと推測される。併せて近年、居心地のよい学級という側面が強調され、規則や規範をアセスメ

ント対象とすることへの関心が薄れてきたためであろう。

しかし、コミットメントの視点を学級経営に導入することによって、学校生活不適応者を減少させ、学級集団からの逸脱 (非行や不登校など) の予防が可能になると考える。さらに、児童生徒が安定した精神状態で学校生活を送ることにより、所属感が高まり、学校生活への意欲が高まることが期待できる。

大澤 (2017) は、小学校高学年を対象としてクラスコミットメント尺度を開発し、「クラスのために」、「情緒的愛着」の2因子を抽出した。抽出された2因子には先行研究で示されていた3次元の内容が含まれていたものの、想定した3因子構造とは若干異なる結果となった。例えば、橋本ら (2010) が、集団の問題を自分自身の問題とする意識を「集団同一視」としていたが、大澤 (2017) では、これらの要素を含みながらも、「努力する」、「我慢する」、「犠牲になっても仕方ない」など自分の要求や欲求を統制してクラスやクラスメイトのために尽くすといった内容に絞られた。また、コミットメント尺度の下位因子としての「規範」は抽出されなかった。これらの結果について、大澤 (2017) は、抽出された2因子は発達段階を経て、橋本ら (2010) が見出した情緒的コミットメント、規範的コミットメント、集団同一視コミットメントに変化し、社会人として働き始めることによって、情緒的コミットメント、継続的コミットメント、規範的コミットメントへと分化するものと推測している。

したがって、コミットメントの構造的・質的变化は、年齢が上がるにつれ集団を強く意識するとともに、置かれた集団の特質に適応することによって生ずると考えられる

ことから、小学生用クラスコミットメント尺度だけでなく、中学生用のクラスコミットメント尺度を開発する意義はあると考えた。特に中学生においては、中1プロブレムや非行など、学級経営の視点からとらえるとクラスや学校からの逸脱が小学校に比べると増加する時期でもある。そのため中学生のクラスへのコミットメントを測定することは重要と考える。

そこで、本研究の目的は、児童生徒のクラスへのコミットメントを測定するために、組織コミットメントの観点にもとづく中学生用クラスコミットメント尺度を作成し、尺度の信頼性と妥当性を検討することにあつた。

対象者と方法

1. 調査対象者

中学生を調査対象とし、3校の中学校に依頼した。A中学校209名(1学年2クラス、2学年2クラス、3学年2クラス)、B中学校97名(1学年1クラス、2学年1クラス、3学年1クラス)、C中学校211名(1学年2クラス、2学年2クラス、3学年4クラス)であった。その結果、調査対象者数は1年生5クラス、2年生5クラス、3年生7クラスからなる、計517名であった。

調査は、ホームルーム等を利用してクラスごとに一斉に行った(C中学校の3年生については4クラスにわたり個別に調査を行った)。調査の際に、担任から「みなさんの学校生活の様子を調べ、よりよくすることを目的に行うこと」、

「誰が回答したのかわからないように集計すること」、「回答したくない場合は回答しなくてもよく、そのことによって成績などの不利益は被らないこと」を教示した上で実施した。

2. 調査時期

調査は、クラスづくりが完成すると考えられる年度末で、調査協力校が比較的協力しやすい時期を選び、2015年1月から3月の間に実施した。

3. 質問紙の構成

3次元コミットメント尺度(Allen et al., 1990)の18項目、組織コミットメント尺度(高木ら, 1997)の18項目、サークルコミットメント尺度(橋本ら, 2010)の11項目、家族コミットメント尺度(北川・藤井, 2012)の11項目、の大学コミットメント尺度(萩原, 2003)の16項目、児童用所属感尺度(吉田・岡田, 2010)の17項目、合計91項目の中から、次の手順で研究者1名、小学校教諭1名、中学校教諭1名により30項目に絞り込んだ。①会社・大学を学級に置き換え、中学校の学級集団に使用できるものを抽出し、②内容が似ている項目を整理し、③コミットメントを想定した「情緒的愛着」、「規範」、「集団同一視」の3つのカテゴリーに整理した。「情緒的愛着」は集団に対する愛着や絆に関する項目、「規範」は集団のルールを守ることにに関する項目、「集団同一視」は集団を統制するルールが自身の価値観やパーソナリティに取り込まれた内容に関する項目としてカテゴライズし(表1)。

表1. クラスコミットメント質問項目

情緒的愛着	規範	集団同一視
・家族に、このクラスが「すばらしいクラス」だと言える	・クラスのルールを破ったら、クラスメイトに何と言われるかわからない	・このクラスのためなら、喜んで努力する
・クラス替えはあまりしてほしくない	・クラスのルールを破ったら、私は罪悪感を感じるだろう	・クラスのためならたとえ自分が犠牲になっても仕方ない
・このクラスが気に入っている	・クラスのルールを破らないようにしている	・クラスのために力を尽くしていると実感したい
・このクラスにすることが楽しい	・クラスのためにならないことはしない	・クラスメイトが楽しく学校生活をおくるためには、努力を惜しまない
・クラスで一緒に食事をしたり、話し合ったりするのは楽しい	・クラスの人が掃除しないのは許せない	・クラスメイトの物の考え方・行動は理解できる
・長期の休み(夏休みなど)にクラスメイトに会えない寂しさを感じる	・クラスの人とした約束は守る	・このクラスの悪口を聞くと、嫌な気持ちになる
・このクラスの問題は、自分の問題のように感じる	・このクラスでは、授業開始時にはみんなが席についている	・自分は、このクラスの一員であることを強く意識している
・クラスで行うレクリエーションなどの活動に参加しても、自分は楽しめない*	・クラスのルールを守るのは当然だ	・クラスに困っている人がいたらすぐに助ける
・このクラスの雰囲気が好きだ	・自分が言いたい行動を我慢してクラスの人に合わせることができる	・クラスの人が係活動をよく手伝ってくれていると思う
・私のクラスは居心地がいい	・クラスのルールを皆がよく知っている	・クラスのルールを守るために我慢することができる

* 逆転項目

30項目の質問について、「とてもそう思う(よくある)」、「少しそう思う(少しある)」、「あまりそう思わない(あまりない)」、「全くそう思わない(まったくない)」の4件法で回答を求めた。

また、先行研究においてコミットメントと満足感の相関が高かったことから、妥当性検討のためにQ-Uテストの学級満足感尺度を使用した。学級満足感尺度は、河村・田上(1997)によって開発されたいじめ被害・学級不適応児童発見尺度がベースとなっており、承認因子10項目、被害因子10項目の全20項目からなる尺度である。各項目について、「とてもそう思う」、「少しそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」の5件法で回答を求めた。

4. 結果の整理

因子構造を検討するため、30項目について、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行い、尺度の妥当性を検討するため、Q-Uテストの学級満足感尺度との相関分析を行った。さらに、性差および学年差についてそれぞれt検定を行った。

これらの統計処理は、IBM SPSS Statistic Ver.20を用いた。

結果

1. クラスコミットメント尺度の因子構造の検討

517名の回答からコミットメント項目において欠損値のあった回答者を除外した結果、488名の回答を分析対象とした。

また質問項目30項目について天井効果と床効果を検討した。平均値と標準偏差の合計が最大値を上回った項目を天井効果が認められた項目と判断し、「このクラスにすることが楽しい」、「クラスでいっしょに食事をしたり、話し合ったりするのは楽しい」、「クラスで行うレクリエーションなどの活動に参加しても、自分は楽しめない」、「クラスの人とした約束は守る」の4項目を除外した。なお、平均値から標準偏差を減じた値が最小値を下回った場合はフロア効果が認められた項目としたが、該当した項目はなかった。

天井効果の認められた項目を除いた26項目について最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その分析結果において、因子負荷量が0.45以下であり、かつ、他の因子への負荷量が0.30以上の6項目(「クラスのルールを守るために我慢することができる」、「自分はこのクラスの一員であるということ強く意識している」、

「クラスに困っている人がいたらすぐに助ける」、「クラスの人が掃除しないのは許せない」、「クラスのためにならないことはしない」、「自分が言いたいことを我慢してクラスの人に合わせるができる」)を削除した20項目について、因子分析を繰り返し行った。最終的に固有値2.0以上で因子負荷量が0.45以上、かつ他の因子への負荷量が0.30以下を基準にして、「クラスのルールを破ったら、クラスメイトに何と言われるかわからない」、「クラスのルールを破ったら、私は罪悪感を感じるだろう」、「このクラスでは、授業開始時にはみんなが席についている」、「クラスメイトの物の考え方・行動は理解できる」、「このクラスの悪口を聞くと、嫌な気持ちになる」、「クラスの人が係活動をよく手伝ってくれていると思う」の6項目が削除され、3因子14項目が抽出された(表2)。これは、先行研究を踏まえ本研究でコミットメントを想定した「情緒的愛着」、「規範」、「集団同一視」の3つのカテゴリーにほぼ合致した結果であった。

因子分析の結果、第1因子は、「このクラスが気に入っている」や「私のクラスは居心地がいい」など6項目で構成されており、小学生用のクラスコミットメント尺度(大澤, 2017)の情緒的愛着因子の項目と重複する項目が多かったことから「情緒的愛着」と命名した。第2因子は、「クラスメイトが楽しく学校生活をおくるためには、努力を惜しまない」や「クラスのために力を尽くしている」と実感したい」など5項目で構成されていた。当初想定した集団同一視のカテゴリーと重なった項目が多かったことから、「集団同一視」と命名した。第3因子は、「クラスのルールを破らないようにしている」や「クラスのルールを守るのは当然だ」などの3項目で構成されていた。これらの3項目は最初にカテゴリー化した規範に関する項目であったことから「規範意識」と命名した。

因子間相関は、第1因子の「情緒的愛着」と第2因子の「集団同一視」は $r=0.61$ で中程度の正相関、第1因子の「情緒的愛着」と第3因子の「規範意識」は $r=0.39$ で弱い正相関、第2因子の「集団同一視」と第3因子の「規範意識」は $r=0.61$ で中程度の正相関であった(表2)。

併せて、クロンバックの α 係数を算出したところ、「情緒的愛着」が $\alpha=0.90$ 、「集団同一視」が $\alpha=0.87$ 、「規範意識」が $\alpha=0.74$ であり、いずれも十分な内的整合性を有していることが確認された。

2. クラスコミットメント尺度の併存的妥当性の検討

これまで組織コミットメントと仕事に対する満足度については正の相関が示されている(Reichers, 1986; Cohen, 1993)。また、中村・松田(2012)は大学生を対象として、

表2. コミットメント(中学生版)尺度の因子構造(最尤法・プロマックス回転)

	I	II	III
第1因子：情緒的愛着($\alpha=.90$)			
私のクラスは居心地がいい	.95	-.10	.05
このクラスの雰囲気が好きだ	.90	-.07	.05
このクラスが気に入っている	.87	.01	-.01
家族にこのクラスがすばらしいクラスだと言える	.72	.15	-.03
クラスがえはあまりしてほしくない	.66	-.03	-.05
長い休みにクラスメイトに会えない寂しさを感じる	.48	.20	-.08
第2因子：集団同一視($\alpha=.87$)			
クラスメイトが楽しく学校生活をおくるためには努力を惜しまない	-.04	.89	.01
クラスのためならたとえ自分が犠牲になっても仕方ない	-.11	.82	-.04
クラスのために力を尽くしていると実感したい	.05	.73	.06
このクラスのためなら喜んで努力する	.23	.63	.10
このクラスの問題は自分の問題のように感じる	.16	.45	-.03
第3因子：規範意識($\alpha=.74$)			
クラスのルールを破らないようにしている	-.02	-.05	.80
クラスのルールを守るのは当然だ	-.07	.06	.76
クラスのルールを皆がよく知っている	.04	.01	.55
因子間相関		.61	.39
			.61

大学への愛着と満足感の関連を明らかにしている。これらのことから、本研究で検討を試みたクラスコミットメントと学級満足度には相関が予測された。そこでクラスコミットメント尺度の併存的妥当性を検討するためにQ-Uテストの学級満足度の下位尺度2因子(承認因子、被侵害因子)とクラスコミットメント尺度の下位尺度3因子との相関分析を行った。

その結果、学級満足度の承認因子については、「情緒的愛着」、「集団同一視」と中程度の正の相関がみられ、「規範意識」と弱い正の相関がみられた。学級満足度の被侵害因子については、「情緒的愛着」、「集団同一視」、「規範意識」の全てと弱い負の相関がみられた(表3)。

表3. クラスコミットメントと学級満足度との相関(n=441)

	情緒的愛着	集団同一視	規範意識
承認	.46**	.48**	.24**
被侵害	-.39**	-.29**	-.24**

**p<.01

3. 性差および学年差の検討

クラスコミットメント尺度の下位3因子について、性差の検討を行うために、独立変数を性別、従属変数をクラスコミットメント尺度下位3因子それぞれに含まれる項目の合計得点の平均値としたt検定を行った。その結果、全ての因子において有意差はみられなかった(表4)。

また、クラスコミットメント尺度の下位4因子について、学年差の検討を行うために、独立変数を学年(1年生、2年生、3年生)、従属変数をクラスコミットメント尺度下位3因子のそれぞれに含まれる項目の合計得点の平均値とした一元配置の分散分析を行い、分散が有意の場合は、Tukey法で多重比較を行った。

表4. クラスコミットメント得点の男女別平均値(SD)

	男(n=219)	女(n=222)	t値
情緒的愛着	16.69(4.51)	17.27(4.62)	1.32 n.s.
集団同一視	12.27(3.60)	12.73(3.53)	1.33 n.s.
規範意識	8.93(2.04)	8.72(1.88)	1.08 n.s.

表5. クラスコミットメント得点の学年別平均値 (SD)

	中1 (n=140)	中2 (n=141)	中3 (n=160)	F 値	多重比較
情緒的愛着	16.95 (4.48)	16.13 (4.64)	17.76 (4.47)	4.89**	中2<中3
集団同一視	12.98 (3.43)	11.65 (3.36)	12.84 (3.74)	6.17**	中2<中1, 中3
規範意識	9.39 (1.69)	8.35 (1.86)	8.74 (2.16)	10.46**	中2, 中3<中1

**p<0.01

その結果、「情緒的愛着」は、学年差が有意で (F(2, 438) = 4.89, p<0.01)、多重比較では2年生が3年生と比べて有意 (p<0, 05) に低かった。「集団同一視」は、学年差が有意 (F(2, 438) = 6.17, p<0.01)、多重比較の結果2年生が1年生と3年生に比べて有意 (p<0.01) に低かった。「規範意識」は、(F(2, 438) = 10.46, p<0.01) で学年差が有意で、多重比較で1年生が他の学年に比べ有意 (p<0.05) に高かった。これらの結果を表5に示す。

考察

1. クラスコミットメント尺度 (中学生用) の因子構造

本研究では、クラスコミットメント尺度の開発を試みた。その結果、本尺度は「情緒的愛着」、「集団同一視」、「規範意識」の3因子構造であることが確認された。これは、橋本ら (2010) の「情緒的」、「規範的」、「集団同一視」とほぼ一致した。ただし、当初カテゴリ化した「情緒的愛着」の中の「このクラスの問題は、自分の問題のように感じる」については「集団同一視」として抽出された。この項目は、「情緒的愛着」、「集団同一視」の両方の要素を含む内容であり、中学生にとっては集団同一視の要素が強かったものと考えられる。

小学校高学年のクラスコミットメント尺度 (大澤, 2017) と比較すると、「情緒的愛着」、「クラスのために」の2因子構造であったのに対し、中学生では3因子構造となった。「情緒的愛着」については、小学校高学年用とほぼ同様の項目が抽出された。一方、小学校高学年用の「クラスのために」を構成する項目は、「集団同一視」として抽出された。「クラスのために」は「集団同一視」の中でも「努力」、「犠牲」など児童生徒が能動的に働きかける項目に偏ったことから、「集団同一視」ではなくあえて「クラスのために」と命名した。しかし、中学生においては、そこに「このクラスの問題は、自分の問題のように感じる」の項目が加わったことで、当初カテゴリ化した「集団同一視」として命名することが適当であると判断した。

さらに、小学校高学年では抽出されなかった「規範意識」が新たに抽出された。この結果は、発達の視点で解釈すると、小学校では、個々人がルールを守ることが中心テーマ

であったのが、中学生になると集団を意識した規範意識を持てるようになることが考えられる。

2. 性差・学年差について

小学生用のクラスコミットメント尺度においては、学年差・性差は見いだせなかった。しかし、中学生になると発達や社会化の程度により学年、性別の違いによる差があることが予想されたことから、性、学年の違いによる差を検討した。

まず、性差については「情緒的愛着」、「集団同一視」、「規範意識」の全ての因子について有意差は見られなかった。これは、集団への距離感は性差との関連はないことを示している。

その一方で、学年差については、クラスコミットメント下位3因子全てに有意差がみられた。「情緒的愛着」では、3年生が有意に高く、1年生と2年生に差はみられなかった。これらの結果は、3年生になってクラスへの愛着が増したことによるものと考えられる。調査を行った時期が卒業を目前にしていたことも他学年との違いに反映された可能性がある。「集団同一視」では、1年生と3年生と比べて2年生のみが有意に低くなっており、クラスのために活動したいという意識が低いことが示された。これは、2年生がクラスよりも部活動を優先させている時期であることを考えると、中学校生活全体におけるコミットメントが、クラスと部活動とに分散されていることが推察される。その他に、学校生活が重荷になって学校や学級へのコミットメントが単純に低下していることも考えられた。「規範意識」については、他の学年と比べて1年生が有意に高かった。この結果から、1年生はクラスの規範をベースに集団を強く意識している様子が伺える。

総じて、中学校に入学した1年生は、クラスの枠ともいえる規範を中心にクラス活動を行い、2年生になると中だるみ現象や部活動中心の生活によってクラスへの関与が減り、3年生になってあらためて自分が所属するクラスの居心地のよさを感じるといった流れが想定された。

3. 今後の課題

本研究は、小学校高学年に引き続き、中学生用のクラスコミットメント尺度を開発し、3因子を抽出した。これは、先行研究と同様の結果であった。

今後は、クラスコミットメントを規定する要因の検討が必要である。特に、1年間をどのようなクラスでどのように過ごしたかがコミットメントの違いとして現れると想定される。このことを実証するためには、1年間のクラスコミットメント(4月、7月、12月)の数値的变化や質的变化、担任評価によるクラスの様子の変化について検討していく必要がある。さらに、この年間の変化に加え、組織コミットメント研究において明らかにされているコミットメントの規程要因である組織風土やリーダーシップなどが、児童生徒のコミットメントを決定する要因になるのかどうかについても検討していく必要がある。

以上を踏まえた上で、クラスコミットメントを促進するための教師のかかわりや集団活動についての検討が課題となる。特に、小中学校でクラスづくりを目的に導入されている対人関係ゲーム、構成的グループ・エンカウンター、ソーシャル・スキル・トレーニングがクラスコミットメントを促進するのかどうかの検討が必要である。

結論

本研究で作成された尺度の信頼性を検討するために α 係数を算出した結果、「情緒的愛着」、「集団同一視」、「規範意識」については十分な内的整合性が示された。

また、併存的妥当性を検討するために、学級満足度との相関分析を行った結果、承認因子と「情緒的愛着」、「集団同一視」には中程度の正の相関がみられ、「規範意識」では弱い正の相関がみられた。さらに、学級満足度の被侵害因子とは、「情緒的愛着」、「集団同一視」、「規範意識」に弱い負の相関がみられた。これらの結果から、本尺度の併存的妥当性が認められたといえる。

したがって、本研究で作成したクラスコミットメント尺度(中学生用)は、信頼性、妥当性があるものといえる。

文献

- Allen, N.J. and Meyer, J.P. (1990) : The measurement and antecedents of affective, continuance and normative commitment to the organization. *J. Occup. Psychol.* **63**, 1-18.
- Cohen, A. (1993): Work commitment in relations to 460 withdrawal intentions and union effectiveness. *J. Business Res.* **26**, 75-90.
- 萩原俊彦(2003): 大学コミットメント尺度作成の試みー大学コミットメントと大学生活の関係ー. 日本社会心理学会 第44回大会発表論文集, 352-353.
- 橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年(2010): 大学生サークル集団におけるコミットメントモデル: 準組織的集団からの検討. *実験社会心理学研究* **50**, 76-88.
- 河村茂雄・田上不二夫(1997): いじめ被害・学級不適応児童発見尺度の作成. *カウンセリング研究* **30**, 112-120.
- 北川夏樹・藤井 聡(2012): 共同体帰属意識と主観的幸福感の規定因に関する研究. *グループダイナミクス学会 59回大会発表論文集*, 54-57.
- Mowday, R.T., Porter, L.W., Steers, R.M. et al. (1982): *Employee-organization Linkages: The Psychology of Commitment, Absenteeism, and Turnover*. Academic Press, New York.
- 中村 真・松田英子(2012): 大学生の学校適応に影響する要因の検討ー大学不適応、大学満足、就学意欲に着目して. *江戸川大学紀要* **23**, 151-160.
- 大澤靖彦(2017): 組織コミットメントの観点によるクラスコミットメント尺度の開発(小学校高学年用). *東京福祉大学・大学院紀要* **8**, 55-63.
- O'Reilly, C. and Chatman, J. (1986): Organizational commitment and psychological attachment; The effects of compliance, identification, and internalization on prosocial behavior. *J. Appl. Psychol.* **71**, 492-499.
- Porter, L.W., Steers, R.M., Mowday, R.T. et al. (1974): Organizational commitment, job satisfaction, and turnover among psychiatric technicians. *J. Appl. Psychol.* **59**, 603-609.
- Reichers, A.E. (1986): Conflict and organizational commitments. *J. Appl. Psychol.* **71**, 508-514.
- 高木浩人・石田正浩・益田 圭(1997): 実証的研究. In: 会社人間の研究(田尾雅夫編), 京都大学学術出版会, pp265-290.
- 吉田真知子・岡田 弘(2010): 児童用所属感尺度の構成(1). *東京聖栄大学紀要* **2**, 7-10.

Study on Development of a Class-commitment Scale
from the Viewpoint of the Organizational Commitment:
Focus on Junior High School Students

Yasuhiko OHSAWA and Kaori OKAMOTO

School of Education, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : The purpose of this study was to develop a scale of class-commitment for junior high school students. A questionnaire was distributed to 517 junior high school students in order to explore the reliability and validity of the scale. The factor analyses revealed three main factors, which consist of 14 items. Those factors were labeled as (1) commitment of emotional attachment, (2) commitment of group-identification, and (3) commitment of normative consciousness. A statistically significant correlation was observed between class-commitment and school life scale. These results suggest that the class-commitment scales has sufficient reliability and validity.

(Reprint request should be sent to Yasuhiko Ohsawa)

Key words : Commitment, Emotional attachment, Group-identification, Normative consciousness,
Junior high school student

